

-----  
【テキスト中に現れる記号について】

《》：ルビ  
(例) 久保田万太郎君《くぼたまんたらうくん》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号  
(例) ー|度《ど》

[ # ]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定  
(例) [ #地から2字上げ ] (二、五、七)

-----  
久保田万太郎君《くぼたまんたらうくん》の「しるこ」のことを書《か》いてゐるのを見《み》、僕《ぼく》も亦《また》「しるこ」のことを書《か》いて見《み》たい欲望《よくぼう》を感《かん》じた。震災《しんさい》以來《いらい》の東京《とうきやう》は梅園《うめぞの》や松村《まつむら》以外《いぐわい》には「しるこ」屋《や》らしい「しるこ」屋《や》は跡《あと》を絶《た》つてしまつた。その代《かは》りにどこもカツフエだらけである。僕等《ぼくら》はもう廣小路《ひろこうぢ》の「常盤《ときわ》」にあの椀《わん》になみなみと盛《も》つた「おきな」を味《あぢは》ふことは出来《でき》ない。これは僕等《ぼくら》下戸仲間《げこなかま》の爲《ため》には少《すくな》からぬ損失《そんしつ》である。のみならず僕等《ぼくら》の東京《とうきやう》の爲《ため》にもやはり少《すくな》からぬ損失《そんしつ》である。

それも「常盤《ときわ》」の「しるこ」に匹敵《ひつてき》するほどの珈琲《コーヒー》を飲《の》ませるカツフエでもあれば、まだ僕等《ぼくら》は仕合《しあは》せであらう。が、かう云《い》ふ珈琲《コーヒー》を飲《の》むことも現在《げんざい》ではちよつと不可能《ふかのう》である。僕《ぼく》はその爲《ため》にも「しるこ」屋《や》のないことを情《なさ》けないことの一つに數《かぞ》へざるを得《え》ない。

「しるこ」は西洋料理《せいやうりやうり》や支那料理《しなりやうり》と一しよに東京《とうきやう》の「しるこ」を第《だい》一としてゐる。(或《あるひ》は「してゐた」と言《い》はなければならぬ。) しかもまだ紅毛人《こうもうじん》たちは「しるこ」の味《あぢ》を知《し》つてゐない。若《も》しー|度《ど》知《し》つたとすれば、「しるこ」も亦《また》或《あるひ》は麻雀戲《マーヂヤン》のやうに世界《せかい》を風靡《ふうび》しないとも限《かぎ》らないのである。帝國《ていこく》ホテルや精養軒《せいやうけん》のマネエチャア諸君《しよくん》は何《なに》かの機會《きくわい》に紅毛人《こうもうじん》たちにもー|椀《わん》の「しるこ」をすすめて見《み》るが善《よ》い。彼等《かれら》は天《てん》ぷらを愛《あい》するやうに「しるこ」をも必《かなら》ず愛《あい》するかどうかは多少《たしやう》の疑問《ぎもん》はあるにもせよ、兎《と》に角《かく》ー|應《おう》はすすめて見《み》る價值《かち》のあることだけは確《たし》かであらう。

僕《ぼく》は今《いま》もペンを持《も》つたまま、はるかにニユウヨオクの或《ある》クラブに紅毛人《こうもうじん》の男女《だんぢよ》が七八|人《にん》、ー|椀《わん》の「しるこ」を啜《すゝ》りながら、チャアリ、チャプリンの離婚問題《りこんもんだい》か何《なん》かを話《はな》してゐる光景《くわうけい》を想像《さうぞう》してゐる。それから又《また》パリの或《ある》カツフエにやはり紅毛人《こうもうじん》の畫家《ぐわか》が一人《ひとり》、ー|椀《わん》の「しるこ」を啜《すゝ》りながら、こんな想像《さうぞう》をすることは閑人《かんじん》の仕事《しごと》に相違《さうゐ》ない。しかしあの逞《たくま》しいムツソリニもー|椀《わん》の「しるこ」を啜《すゝ》りながら、天下《てんか》の大勢《たいせい》を考《かん》がへてゐるのは兎《と》に角《かく》想像《さうぞう》するだけでも愉快《ゆくわい》であらう。

[ #地から2字上げ ] (二、五、七)

底本：「芥川龍之介全集 第九卷」岩波書店

1978 (昭和53) 年4月24日初版発行

1983 (昭和58) 年1月20日第2刷発行

初出：「スポート 第二卷第三號」明治製菓株式會社

1927 (昭和2) 年6月15日

入力：高柳典子

校正：多羅尾伴内

2003年6月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。